熱い手

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱い手

【Nコード】

N1892F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

同じクラスの直樹と相思相愛の郁美。けれどまだ小学生の二人の恋の歩みはともぎこちなくて。子供同士の純愛です。

第一章

熱い手

里田郁美はやつと六年生になったばかりだ。小学生だ。

背は六年の女の子の間では高く髪は黒、それをポニーテールにしている。目は大きくはつきりとしている。すらりとしていて何処か男の子めいてもいる。

クラスでは人気者で女の子の間では中心人物の一人だ。成績もそこそこよく何よりも運動神経抜群で面倒見のいい性格だ。男の子に近いとも言える。

いつも周りには女の子がいる。教室では彼女の机の周りに女の子が集まっている。

「昨日のあのドラマどうだった？」

「ああ、あれね」

皆郁美の机を囲んで昨日のドラマの話をしていた。今話題の恋愛ドラマだ。彼女達もそのドラマを毎週欠かさず見ているのである。

「昨日の展開凄かったわね」

「そうよね、ああなるなんてね」

「思わなかったわ」

少し驚いた顔で話をしていた。

「不治の病なんてね。とても」

「思わなかったっていうか？有り得ないわよね」

「あれ伏線あったじゃない」

ヒロインの話だ。昨日の放送でヒロインが不治の病だとわかったのだ。

「咳き込んだり。眩暈がしたり。何回かあったわよ」

「あれっ、そうだったの？」

「わからなかったわ」

それぞれの口で言う。わかっているのは郁美だけだったみたいだ。

「ああした展開であんなのあったらやっぱりね。あるに決まってるじゃない」

「わからなかったわ」

「あれ位じゃ」

「あのドラマね。伏線は小出しにしてしかも目立たないようにしてるのよ」

楽しそうに皆に話しつつ笑う郁美だった。

「だから気をつけてね。よく見ないとわからないわ」

「よく見ないとだね」

「難しいわね」

「難しいけれど面白いじゃない」

郁美の言葉は矛盾しているようで密接に関係しているものだった。

「あのドラマ。来週はどうなるか楽しみね」

「そうね。果たしてどうなるか」

「それにしてもねえ」

ここで女の子の中の一人が。ふと思いついたように言うのであった。

「あんな恋したくない？」

「恋？」

「そうよ。あそこまで一途な愛」

恋と愛が混合した話になっていた。

「主人公も一途だしヒロインも病気でも何処までも頑張ってる」

「そうそう。お互い必死でね」

「見ていて応援したくなるのよ」

「郁ちゃんはどう思うの？」

郁ちゃんとは郁美の仇名である。時々こう呼ばれるのだ。その仇名で呼ばれて当の郁美はすぐに言葉を返すのだった。即位即答であった。

「あんな恋したいと思う？」

「そこんとこどうなの？」

「憧れるっつていえば憧れるわ」

郁美は友人達の言葉に素直に言葉を返した。

「正直なところね。夢物語みたいだけれどね」

「まあそれはね」

「あそこまでの展開はねえ」

女の子達は苦笑いを浮かべだした。彼女達もそうそうベタな展開の恋愛なぞまず有り得ないとわかってはいるのだ。わかっけても憧れるのであるが。

「ないわよね」

「それでもね。やっぱり一途に」

「そう、一途によね」

郁美はここで言い切った。

「恋ってやっぱり一途じゃないと駄目よね」

「そうそう、愛し愛されて何処までも」

「それこそっつてやつ？やっぱり」

「そうよね、一途ね」

郁美は言い出した本人でありながら今の周りの言葉にうんうんと頷いていた。

「一途でないとね。愛する方もね」

「さもないと恋愛じゃないわよね」

「何処までも二人でね」

「そう、二人ね」

郁美はその二人という言葉にすぐに反応してまたうんうんと頷いた。

「二人なのよね。恋愛って相手がいないと駄目なのよね」

「当たり前だけれどね。ただ郁ちゃん」

「何？」

「今日の郁ちゃんちょっとおかしくない？」

「おかしいわよね、そういえば」

「ねえ」

周りから言われたしたのであった。言われた郁美は少し戸惑った感じになった。

「そうかしら。私は別に」

「違うの？」

「全然いつもと一緒によ」

場を取り繕って言うのだった。言葉が少し浮ついた感じになっている。

「何処か違うかしら」

「言われてみると別に」

「おかしくないけれど」

「そうよ。だから普通よ」

さらに言い繕う郁美であった。

「ただね。それでもね」

「あんな恋愛したいのね」

「私はあのヒロインみたいに不治の病じゃないけれど」

運動神経抜群である。この一年風邪一つひいたことのない健康優良児でもある。それは自分でわかってわきまえてはいるのである。しかしだ。

第二章

「シチュエーションは様々よね」

ちらりと教室のある場所を見た。

「別に私が不治の病じゃなくても男の子みたいなのところがあったもね」

「やっぱりおかしいかしら」

「そうかも」

皆やはりおかしなところがある今日の郁美を見て言うのだった。

この日の放課後。一人下校する郁美の前にある男の子が待っていた。背は彼女と同じ位であるが線は女の子である彼女よりも細く色白で繊細そうな少年だ。俯き気味の顔は頼りなげだが綺麗なものだ。だがその綺麗さは女の子のもので男の子のものではなかった。むしろ郁美よりも女の子らしい顔立ちの男の子であった。その彼が郁美の前に壁に背をもたれさせて立っていたのだ。

「待っていたのね」

「うん」

男の子は郁美の顔を見てこくりと頷いてきた。

「少しね」

「少しってどれ位？」

「少し前に来たばかりだよ」

優しいな笑みを浮かべての言葉であった。

「だって。クラスが同じじゃない」

「ふふふ、そうね」

彼の言葉を聞いてにこやかに微笑む郁美だった。

「けれどクラスの皆には内緒よ」

「うん、わかってるよ」

彼も自分の笑みで郁美に返した。

「それは気をつけてるから」

「お互い気をつけましょうね」
郁美はこのことを念押ししてきた。
「見つかったら。やっぱりね」
「困るよね」
「そういうことよ。クラスの皆には内緒よ」
顔が少し厳しいものになる。
「二人だけの秘密なんだから、これは」
「そうだね。二人だけの秘密だよ」
「直樹君」
郁美はここで彼の名前を呼んだ。
「けれどそれでいいわよね」
そつと彼の側に来て怪訝そつな顔で彼に問うた。
「秘密で。それでいいわよね」
「僕はそれでいいよ」
直樹も直樹で郁美のその言葉を受けて微笑んで頷く。
「六年二組新山直樹」
「何でそこで名前が出るの？」
「僕ってあまり存在感ないじゃない」
自分ではそう思っているようだった。
「だからさ。時々こうやって言わないと。郁美ちゃんにも覚えてもらえそうにないし」
「覚えてるわよ、っていうか絶対に忘れないわ」
歩きだした。歩きながら直樹に対して告げる。
「直樹君のことはね」
「有り難う。それでね」
「それで。何？」
「皆には見つかっていないよね」
今度は彼の方からこのことを尋ねたのだった。
「ここまで来るのに」
「大丈夫よ。それどころか皆気付いてもいないわ」

「このことはしっかりと保障するのだった。」

「気付かせてたまるものですか」

「僕も。郁美ちゃんがそう言ってくれるのなら」

「合わせてくれるのね。有り難う」

直樹の言葉にまた頷く。

「それじゃあ。行きましょう」

「うん」

本格的に歩きはじめる。二人だけのささやかなデートだ。郁美はそこで何故かやけにそわそわしていた。直樹もそのことに気付くのがあった。

「ねえ郁美ちゃん」

「何？」

「何か待ってるの？」

そわそわした郁美を見て問うのだった。

「ひょっとして。何？」

「あのね」

ここで郁美は。彼にも昨日のドラマのことを言うのだった。

「ほら、今月曜の九時からやってるドラマあるじゃない」

「ええ、あれね」

そのドラマのことは直樹も知っているようだった。気付いてまた郁美の言葉に頷くのだった。

「あのドラマね。かなり面白いよね」

「あのドラマ観てるとね。何か」

郁美は少し恥ずかしそうに直樹に言葉を続ける。

「あの。少し」

「少し？」

「真似しておこうかしらって思って」

そのことを直樹にも言うのだった。

「それでね。よかったら」

「うん」

「少し真似してみようと思ってるのよ」
「やはり恥ずかしそっぴに直樹に対して言っ

第三章

「あのドラマみたいに。駄目かしら」

「あのドラマみたいについていうと」

「ここで直樹はそのドラマのことをまた気付くのだった。気付くと話はさらに動いた。」

「不治の病になるってこと？」

「違うわよ、そんなことじゃなくて」

「それは苦笑いで否定するのだった。」

「ほら、ああしたふうに。一途について」

「一途についていうと」

郁美の言葉に直樹は首を傾げるのだった。

「それってつまり」

「つまり。そうよ」

「ここぞとばかりに直樹に言う。」

「例えば。手を握ってね」

「手を握るの」

「駄目かしら」

自分と同じ位の背丈の男の子を見て問う。彼女の目線が丁度彼の目線の位置だった。やはり二人の背丈は同じ位だった。直樹の方が華奢であるが。

「それは。やっぱり」

「いや、いいよ」

しかしここで彼は言う。郁美にそつと。

「悪いって言うわけじゃないじゃない。郁美ちゃんの御願いなのに」

「有り難う」

「それでどうするの？」

具体的に何をするのかを郁美に対して尋ねた。

「あのドラマみたいについていうと」

「手……握ってくれるかしら」
そつと直樹に囁いた。

「私の手。握ってくれる？」

「いいよ」

微笑んで郁美に答えた。

「じゃあ。握ろう」

「握ってくれるのね」

直樹の言葉だけで幸せな気分になる郁美だった。

「有り難う。私が我儘言ってるのに」

「だから。郁美ちゃんの頼みじゃない」 106

このことをまた郁美本人に伝える。

「だから。いいよ」

「私だからいいのね」

「うん」

にこりと笑つての言葉であつた。

「そうだよ。郁美ちゃんだからね」

「どうして私だといいのよ」

「それはね」

だがここで直樹は。照れ臭そうに笑つて沈黙したのであつた。

「何て言うかな。ちよつとね」

「ちよつと？」

「言つてもいいかな」

その照れ臭そうな笑みのままで郁美にまた言う。

「これって。怒らないよね」

「ええ、怒らないわ」

そのことを直樹に強く約束した。

「だから言つて。どうしてなの？」

「好きだから」

この言葉を言った瞬間に顔を真っ赤にさせる直樹であつた。

「郁美ちゃんのが好きだから。だからね」

「だからいいのね」

「うん」

真っ赤な顔でこくりと頷く。

「そうだよ。郁美ちゃんが好きだからね」

「そうなの。私が好きだから」

「だから手だって何だって」

「こつまで言うのであった。」

「いいよ。好きなだけ握って」

「………ありがとう」

郁美もまた顔を赤くさせていた。その赤くなった顔で直樹に告げた。

「そう言ってもらえたら」

「僕もあのドラマ観てるし」

「これは彼も同じだったのだった。」

「それにね」

「まだ。何かあるのね」

「そうだよ。郁美ちゃんも僕のこと好きだよね」

何とこのことを彼女に直接尋ねてきたのだ。これは郁美にとっては驚くべきことだった。]

「それは。その」

「さっきあのドラマみたいにして言っただじゃない」

「こごぞといった感じで出してきた話であった。」

「だからだって。それで」

「あのドラマみたいに」

「僕は郁美ちゃんのことを好きで」

またこのことを話す。

「郁美ちゃんは僕のことどうなの？」

「私が直樹君のことを」

「そうだよ。どうなのかな」

多少くどいまでに尋ねてきた。

「僕のこと。どうなの?」

「あのドラマは相思相愛よね」

俯いてやはり彼女も顔が真っ赤になっていた。直樹と同じように。

「何があっても。一緒よね」

「うん、本当に不治の病になってもね」

だから人気のドラマになっているのだ。オーソドックスなストーリーであつてもだ。それでもそこに想いがあれば人はそこに己の心を移入できるのだから。

「一緒だよね」

「私。まだ小学生だけれど」

やはり顔は真っ赤なままであつた。

「それでも。あのドラマ大好きだから」

「それで僕のことなんだね」

「……ええ」

顔がさらに赤く、これ以上はないというまで赤くなってくりと頷いた。もうそこに偽りはなかった。あるのは心からの真実の言葉だけであつた。

「あのドラマ抜きにしても。私は直樹君が」

「そうなの。僕と同じだね」

「おかしいわよね。私達まだ」

ここで郁美は自分達のことを振り返つた。そのうえで言葉だつた。

第四章

「小学生なのにね」

「そうだね。確かに僕達まだ小学生だよね」

「ええ」

顔は俯いたままだった。言葉だけで応える。

「まだね子供よね」

「それでも。好きだよね」

「………うん」

またこくりと頷く。やはりその気持ちはどうしても否定できないのだった。

「好き。本当よ」

「僕も。好きだよ」

「だから手だつて握って欲しい」

もうその手は真っ赤になっていた。顔と同じ色であった。

「今は。それ以上はとても怖いけれど」

「………キスとかだよね」

それ以上が何なのか。もう二人はわかっていた。学校の授業でも習ったしそれに本や漫画、友達同士の話でも出て来る。だから知らない筈がないのだ。二人の年頃になると。

「その他にも」

「それ以上は怖くて。まだ無理だけれど」

「このことをまた直樹に告げる。」

「………手を握る位なら」

「僕も。その位なら」

「だから御願い」

まだ手は握られてはいない。握られなかったのだ。お互いに。

「握って。私の手」

「僕の手も握ってくれるよね」

「ええ」

こくりと頷くだけでも精一杯だった。どうしてここまで緊張しているのか、ここまで辛い気持ちなのか。それは自分でも不思議だったが心の何処かで納得しているのも事実だった。どうしてこうなっているのか。

「お互いに。握り合いましょう」

「それじゃあ」

直樹の方から手を差し出してきた。

「握ろう。今から」

「………うん」

直樹が手を差し出してきたのを見て。郁美も手を動かした。けれどその手の動きはとても遅く震えてさえいた。それが彼女にとっては非常にもどかしかった。

「………動かない」

真つ赤なままの顔で言った。

「どうしても。どうして」

「僕もだよ」

見れば直樹の手の動きも遅かった。それに彼の顔もやはり真つ赤なままであった。

「何か。動かないや。どうしてかな」

「動いて欲しいのに」

心ではこうであった。

「それでも。動かないなんて」

「けれど。少しずつ」

直樹はここで言った。

「動いているじゃない。ほら」

「少しずつなのね」

「そうだよ。少しずつだけれどね」

見ればその通りだった。かじかんで震えているように動けない二人の手は少しずつではあっても互いに近付いていた。そして遂に。

その先と先が触れた。

「あっ」

「どうしたの？」

「温かい」

まず郁美はこう言ったのだった。

「直樹君の手。温かいよ」

「郁美ちゃんの手もね」

直樹もまた郁美に言った。彼は微笑んでいた。

「温かいよ。とても」

「熱い位」

郁美は次にこう言った。

「直樹君の手って。こんなに」

「郁美ちゃんの手もだよ。温かいなんてものじゃないよ」

「熱いのね」

「真っ赤だしね」

そうだったのだ。二人の手は相変わらず真っ赤なままだ。その真っ赤な手同士が触れ合って。それで熱いものと熱いものが触れ合ったのである。

「熱いのも当然ね」

「そうね」

「じゃあ。握ろう」

直樹の方から言ってきた。

「いや、握ってくれる？」

「言われなくても握るわ」

郁美の顔は真っ赤だが微笑んでいた。

「だって。私が言ったんだし」

「そういえばそうだったかな」

「言った本人が握らないと」

駄目だというのである。その真っ赤な顔で語っていた。

「駄目じゃない。そうでしょ？」

「いや、こういうのは」

珍しいことに直樹が郁美に言い返すのだった。

「男の子が女の子にやるんじゃないかっただけ」

「そうだったかしら」

「そうだったと思うよ。だから」

「握ってくれるのね」

「うん」

にこりとした笑みのまままた郁美に告げた。

「それで。いいよね」

「嫌なんてとても」

また顔を俯かさせての言葉だった。

「言う筈ないじゃない。だから」

「握るよ」

「ええ」

またこくりと頷く。

「御願ひ。じゃあ」

「うん。いくよ」

握った。そうして握ると郁美の真っ赤な手は。やはり温かいどころではなく熱いものだった。その熱さが彼に手にも直接伝わってきた。

第五章

「熱いよ」

「直樹君の手も」

握られている郁美も同じものを感じていたのであった。その熱さを。

「熱いわ、とても」

「何でこんなに熱いんだろう」

お互い熱いものを感じながらこの言葉を出した。

「郁美ちゃんの手。どうしてなんだろう」

「それは」

「僕の手も熱いんだよね」

「今度も郁美に問うた。」

「それもかなり」

「そうよ、とても熱いわ」

「お互いが熱いものを感じている」

「とてもね。こんなに熱い手なんてはじめてよ」

「一緒だね」

「そうね。一緒ね」

本当に一緒なのだった。二人の手の熱さは。だがそれがどうしてなのか二人はわかりかねていた。手を握り合っただけお互いの顔を見詰め合ってそれを探し合っていた。

「どうしてなのかな」

「ええと」

ここで郁美は。己の頭の中にあるものを必死に調べながら答えた。そして出て来た答えは。「あのドラマと同じだからね」

「あのドラマと同じ？」

「そうよ。同じなのよ」

手を握り合っただけ直樹に言うのだった。

「あのドラマと。同じなのよ」

「けれどあのドラマは」

だが直樹は。あのドラマを思い出して言う。あのドラマではヒロインは不治の病だ。それが念頭にある。しかし今はあえてそれを頭から離して考えて。それから答えたのだった。

「そうか。一緒だね」

「ええ、一緒よ」

述べる郁美の顔は微笑んでいた。

「お互い。本当に好きだから」

「だから手が熱いんだ」

「顔も真っ赤でね」

何故顔がここまで真っ赤なのかも今わかった。それは決して恥ずかしいからではなかったのだ。好きだから真っ赤になっていたのだ。

「だからだったのよ」

「何か。おかしいね」

ふとした感じで直樹は述べた。

「それって。やっぱり」

「どうしておかしいの？」

「だって僕達まだ」

彼は自分の立場に返ってこの言葉を出した。

「小学生なのに。こんなふうに想い合うなんて」

「小学生でも」

「そうだよ。おかしいんじゃないかな」

また言う直樹だった。

「こんなので。まだ子供なのに」

「確かにね」

郁美もそれはまずは認めただった。

「おかしいわよね。私達まだ六年なのに」

「小学生なのに」

「お父さんやお母さん、先生に知られたら」

まだそうした人達を気にする歳であった。

「物凄い怒られるわよね」

「勿論皆に知られたらそれこそ」

「何を言われるかわからないわ」

これはもう最初からわかっていた。だから秘密にしているのだ。

「それでも。それでもね」

「うん」

「今のこの気持ち、嘘はつけないわ」

郁美の答えであった。

「誰に何を言われても。何歳でも」

「何歳でもなんだ」

「同じでしょ？」

そして直樹に意見を求めてきた。

「それは直樹君でも。どうなの？」

「正直に言っ方がいいよね」

「ええ」

むしろここでは何としても正直に言っただけ欲しかった。それが今の

郁美の本音だった。

「御願い。言っただけ」

「同じだよ」

微笑んで郁美に答えた。

「郁美ちゃんと同じだよ。同じ考えだよ」

「そう。それじゃあ」

「このまま歩こう」

その微笑みのまま郁美に勧めてきた。

「このまま二人で。手をつないだまま」

「誰かに見つかるかも知れないの？」

「見つからないよ」

実は根拠はないが自信があった。絶対に見つからないという自信が。

「だから大丈夫だよ」

「信じていいのね」

「うん。信じて」

その自信のままに郁美に言葉を返す。

「できたら。これからもずっとね」

「ずっとなの？」

「何時までも何時までも」

話は遙か先のことにまで及んでいた。

「僕を信じて。僕も郁美ちゃんを信じるから」

「お互い信じ合って」

「手を握り合っていいこう」

この言葉と一緒に郁美の手を少し強く握った。その手はやっぱり熱かった。

「ずっとね」

「わかったわ。じゃあずっとね」

「うん、ずっと」

二人で言葉を確かめ合う。そこにあるものも。

「一緒だよ。僕達は」

「ええ。それじゃあずっとね」

「手を握り合って」

「二人で並んで歩いて」

真つ赤なままの顔を見合わせて顔と同じ色になってしまい熱くなっている手で握り合ったまま二人は歩き出した。前からは大きな赤い夕陽が見える。それが二人の影を長く見せていた。二人はその影を見ることなくただ前を見て並んで歩き出していた。長い道を二人で。

2
0
8
·
8
·
1
7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1892f/>

熱い手

2010年10月8日15時31分発行